



(写真左から)須田龍之介選手、畔地毅選手、百瀬祐主将、榎田大志主務

団結力と自己犠牲の精神 「1部復帰」目指す

秋の関東大学リーグ戦へ 燃えるラグビー部

学生記者
小保方愛香（法4）
松岡響紀（経済2）

ラグビー部が秋の関東大学リーグ戦に向けて闘志を燃やしている。2021年にリーグ戦1部から降格、2部優勝の2024年シーズンは関東学院大（1部8位）との入れ替え戦に惜敗し、あと一歩で復帰を逃した。「今季こそ1部昇格」と気合を込める百瀬祐主将（理工4）ら部員の声、意気込みを紹介する。（各選手のプレー中の写真はラグビー部提供）

ももせゆう

百瀬祐主将**理工学部4年 186センチ・109キロ**
FWロック 神奈川・桐蔭学園高

- A1** 2部優勝と1部昇格。前年の悔しい思いをバネに、個人練習など毎日の小さな行動を継続して積み重ねていきます。
- A2** 攻撃の組み立て方などチームが実践したい「絵」を共有する。後輩が先輩に声をかけやすい雰囲気を作るなど、何でも率直に言い合えるようにしたい。
- A3** (ゲームの勝負どころとなる) 後半の後半になったときのチームへの気配り。きつい状況で、技術うんぬんよりもフィールドの14人への声かけ、アプローチを大事にしたい。
- A4** 2024年の1部・2部入れ替え戦。最後の最後に甘さが出てしまい、悔しい思いをしました。
- A5** ラグビーの自己犠牲の精神が好きです。人と人が助け合う、人間らしさにあふれた競技だと考えています。

あぜちたけし

畔地毅選手**総合政策学部4年 187センチ・120キロ**
FWプロップ 東京・大東文化大一高

- A1** 最上級生の役割を全うして2024年にかなわなかった1部昇格を果たす。意思統一を図り、秀でた選手が多くないからこそ、例年以上に団結力が必須になります。
- A2** ラグビーの根幹である自己犠牲の精神から選手同士の信頼が生まれます。その関係を深めていくことが重要だと考えています。
- A3** 1年生からの試合出場の経験を生かした指導力と、「考えていることをしっかり伝える」という言語化能力。言語化能力は3年生でスクラムリーダーになって以来、意識しています。

選手名、学部・学年、身長・体重の次はポジション、出身高校の順。質問項目は次のとおり。

- Q1** 秋のリーグ戦の目標を教えてください。達成のために必要なことは何ですか
- Q2** チーム状態をさらに上げていくのに必要なことは何ですか
- Q3** 自分自身の強みや特長、また「ここを強化したい、改善したい」という点がありますか
- Q4** 最も印象に残っている試合を教えてください
- Q5** ラグビーの魅力を言葉にすると、どのような内容になりますか



百瀬祐主将

- A4** 2024年の1部・2部入れ替え戦です。後半25分過ぎから出場しましたが、先輩たちの最後の試合で、自分の役割を果たせなかった悔しさが残りました。(今季は)絶対に後悔で終わらせたくありません。
- A5** スクラムのぶつかり合いに注目してほしいです。

えのきだたいし

榎田大志主務**法学部4年**
主務 茨城・茗溪学園高

- A1** 非常に厳しいシーズンになると予想しています。学生スタッフとして、チームの雰囲気を含めた環境づくりに励みたい。15のポジションが互いに信頼し合うため、「本音」を言い合えるかどうかが重要です。
- A2** チーム状況は良くなっていますが、春シーズンが終わり、「慢心」が一番怖いです。「これでいいや」という思いが生まれると、夏に強化してくる他大学に差をつけられるだろうと危惧しています。
- A3** 前年まで選手として出場、今年度から学生スタッフとして活動し、自信と行動力があることが強みです。チームのスポンサー獲得やクラウドファンディングにも取り組んでいます。部活動の運営に関する事柄を今以上に選手と共有し、資金面などで支えてくれている保護者やOBに感謝するラグビー部にしたいです。
- A4** 2024年の1部・2部入れ替え戦です。(自身にとって) スターターとして出場した人生最後の試合が後悔

で終わってしまい、同級生や後輩には同じ思いをしてほしくないです。

A5 勝つために自己犠牲を惜しまない選手の姿に注目してほしいです。

す だ り ゅ う の す け 須田龍之介選手

法学部3年 175センチ・82キロ
BKスクラムハーフまたはスタンドオフ 大阪桐蔭高

- A1** 自分たちがやっていることを信じ、すべての試合を全力で戦い、(相手を)圧倒しなければならないと思っています。
- A2** 個々の能力が低いからこそ、全員が役割を高いレベルで全うしないとイケない。15人で戦うスポーツで、個人の力は弱くてもチームとして良い結果は残せます。
- A3** ラックやモールで最初にボールを触るなど、ゲームメイクという役割を任されているからこそ、一つのミスがピンチを生んでしまいかねないことを大学の2年間で学んできました。最適なプレーを選択できるようにし、プレーの精度も高めたいと考えています。
- A4** 高校3年で経験した花園(全国高校ラグビーフットボール大会)です。ラグビーの楽しさと、負けを経験したことによる悔しさを知りました。
- A5** 仲間のために、命を懸けてボールを前に運ぶスポーツです。



須田龍之介選手(中央手前)



畔地毅選手

2024年関東大学リーグ戦2部 中央大学戦績

- 中央大 51-31 國學院大 ● (9月15日)
●中央大 17-19 山梨学院大 ○ (9月22日)
○中央大 97-0 国士館大 ● (10月6日)
○中央大 60-31 朝鮮大 ● (10月13日)
○中央大 40-31 専修大 ● (10月27日)
○中央大 31-24 拓殖大 ● (11月10日)
○中央大 55-14 白鷗大 ● (11月24日)

1部・2部入れ替え戦(12月15日)

- 中央大(2部1位) 38-49 関東学院大(1部8位) ○

「騎虎」スローガンにチーム一丸 中央大学学友会体育連盟 ラグビー部

1924(大正13)年創部。監物弘仁監督。百瀬祐主将(理工4)。部員数68人(選手60人、マネージャー8人)。2021年の関東大学リーグ戦1部・2部入れ替え戦で敗れ、ラグビー部史上で初めて2部に降格した。チーム全員が猛烈な勢いで1つの方向に突き進むという気持ちを込めた「騎虎」をスローガンに、一丸となって今季こそ1部復帰を目指す。

取材後記

情熱的で誠実 本気でラグビーと向き合う
等身大の自分を語る姿が印象的

学生記者 小保方愛香（法4）

取材を終えた今、私の中で中央大学ラグビー部への印象は大きく変わった。私は体育連盟女子ラクロス部の一員として日頃からラグビー部とグラウンドを共有しており、練習後にはグラウンド外で準備をしているラグビー部の選手の姿を目にしていた。真剣な表情や鍛え上げられた体格から、どこか自分とは違う世界にいる存在のように感じていたのが正直なところだ。

しかし、今回の取材で出会った選手たちは、礼儀正しく、情熱的で、そして何よりも誠実な姿勢を持った人たちだった。一人ひとりがしっかりと自分の考えやチームへの思いを言葉にし、質問にも真正面から向き合ってくれた。誰一人として取り繕う様子はなく、等身大の自分として本音を語る姿がとても印象的だった。自分の強みや課題、チームの目指す方向まで、曖昧さのない言葉で話してくれたことで、選手たちの内面や人間性が自然と伝わってきた。

また、ラグビーという競技を支えているのは、プレーの技術や体力だけではないことも強く感じた。仲間との信頼関係や、自己犠牲の精神、支えてくれる周囲への感謝の気持ち。それぞれが当

たり前のように語る姿から、ラグビー部の文化や空気が垣間見えたと感じた。取材を通して、言葉や考えに触れる中で、これまで感じていた距離や印象は自然とほぐれていった。

取材の最後に「学生へのメッセージを」と頼んだところ、4人それぞれが自分の経験を踏まえたメッセージを語った後、「ラグビー部は怖くありません!」と笑顔で声をそろえて伝えてくれた。その一言には、彼らが築いてきたチームの雰囲気や人柄の良さがにじみ出ていて、とても印象に残っている。

壁のない雰囲気、あたたかい空気、そして本気でラグビーと向き合うまなざし。そのすべてが、中央大学ラグビー部の魅力であると感じた。4年生にとってはラストイヤーとなる今、彼らがどんなストーリーを描いていくのか、とても楽しみであり、心から応援したいと思う。そして私自身も同じく大学生活最後の年を迎える中で、今回の取材は大きな刺激となり、「自分も頑張ろう」と素直に思えた。背中を押してくれたこの時間に、心から感謝している。

取材後記

好きだからこそラグビーに打ち込める
やらされるのではなく、自ら行動しようとする姿勢

学生記者 松岡響紀（経済2）

今回の取材で、4人全員のラグビーに対する愛情、熱意を感じ取ることができた。ラグビーをする原動力はズバリ、「ラグビーが好き」「ラグビーがもっとうまくなりたい」という気持ちだという。

ラグビーはその経験の有無にかかわらず、どちらかというと、「けがをしてしまうのでは?」という危険を伴うスポーツという印象が強いのではないだろうか。実は私も中学校時代、ラグビー部の体験入部でタックルの練習をした際、ものすごい勢いで体が飛ばされ、それが原因で入部しなかったという経験をした。

ラグビー部員は、けがを減らし、リスクを避けるためのトレーニングをもちろん行っている。リスクはゼロにはならないかもしれないが、百瀬祐主将は、「ラグビーが好きだからという気持ち」が原動力になり、競技に打ち込むことができるという。「自分の好きなものを大切に、全力で取り組んでほしい」という後輩や、未来のラグビー部員への百瀬主将のメッセージも印象に残った。

これまでの自分自身の学生生活や、学生記者としての取材を通して、以前から感じていたことだが、やはり好きなものが明確に決まっているからこそ、「練習でできたことを試合で生かしたい」「絶対に相手に負けたくない」という向上心につながるのだと改めて感じた。

そのためには、誰かにやらされるのではなく、自ら行動しようとする姿勢が大切だ。これは選手の皆さんも話していたことであるが、下級生ほど慢心してしまい、やらされる練習になってしまいがちで、そうした姿勢をどうやって脱却するかが重要になるという。

今回の取材で、チームメイト同士が本音を言い合える雰囲気、お互いを人として信頼できる関係になることの大切さも改めて知った。自分の好きなことを見つけ、どのような姿勢で取り組まなければならないかを再考する良い機会になったと思う。



事前観覧会での記念撮影。(写真左から)大村雅彦理事長、絵画を寄贈した才田峰風氏と父の白石勤氏、森重昭・佳代子ご夫妻、森光法学部教授＝2025年5月13日(写真提供:法と正義の資料館)

敵味方を超えた相互理解 「被爆者」「遺族」としての共感

「森重昭と被爆米兵調査－戦争が終わるということ」

多摩キャンパス「法と正義の資料館」第2回企画展示

1945年8月6日、米軍機 B29 が広島に投下した原子爆弾による被爆者で、中央大学出身の森重昭氏は、日本軍捕虜として広島で被爆した米兵について調査し、米兵遺族にその内容を手紙で伝える活動を約半世紀にわたり続けてきた。多摩キャンパス「法と正義の資料館」では、森氏の活動に焦点を当て、戦後80年の節目に、戦争終結の意味を改めて問いかける第2回企画展示「森重昭と被爆米兵調査－戦争が終わるということ」を開催している。

展示では、森氏の調査のきっかけが、NHK が1974～75年に原爆体験を描いた「原爆の絵」を募集し、その中に「(広島の)相生橋で亡くなっている米兵の姿」「広島城付近で連行されていく2人の米兵の姿」を描いた作品があり、それを見たことだと紹介している。

森氏は生き残った関係者らを訪ね歩き、確実な情報を集めていった。森氏自身は爆心地から約2.5キロ西の橋にいて爆風で川に飛ばされ、幸い無傷だったという。

米兵は、爆心地の東約600メートルの中国憲兵隊司令部などにいた捕虜12人が被爆死した。このうち6人は7月28日の呉軍港周辺への空襲の際、対空砲火で撃墜された米軍

取材後記

「真実を伝える」という信念に強く共感

学生記者 金岡千聖（商3）

広島に投下された原子爆弾で被爆した米兵の存在について、長く調査を続けた森重昭氏の活動を知ることができた。展示を見て、私は森氏の活動に深く感動し、たくさんのことを考えさせられた。

森氏は企業に勤めながら、膨大な時間と金銭を費やして、一人で情報を集め、真実を追究し続けた。その執念と情熱に驚いたと同時に、なぜ何十年もこの活動を続けてこられたのかという疑問も湧いた。理由の一つに、森氏が被爆米兵を「敵」ではなく、「自分と同じ被爆者」と見ていたことにあるのではないかと私は考えた。

当時、アメリカ政府は米兵の被爆という事実を公表せず、遺族には「戦死」とだけ伝えていた。ロンサムレディー号の生存者や遺族からも長らくこの話題に触れようとはしなかったという。

しかしながら、森氏は自身も被爆者としての苦しみを知っているからこそ、米兵の遺族の苦しみに共感することができ、彼らに起きた出来事を伝えたいという使命感に駆られたのではないだろうか。敵味方を越えた相互理解を重くみるその姿勢から、森氏の平和への思いを感じた。

森氏の活動が、歴史の闇に消えようとしていた事実を掘り起こし、被爆米兵遺族との交流に結び付いていったことは、かつての戦争で傷を負った人々にとって、大きな前進であると感じた。森氏の活動がなければ戦争による敵対関係を越えて互いを理解する機会が生まれることはなかっただろう。

「平和への向き合い方」 森氏の姿勢に学ぶ

2016年に当時のアメリカ大統領であるバラク・オバマ氏が広島平和記念公園を訪問し、森氏の活動について言及した演説の後、森氏と抱擁を交わした。今回の展示では、その光景を描いた2作目の絵画「平和の兆しⅡ」が紹介されている。画家の才田峰風氏が本展のために描いたという。この絵を見ていると、戦争が終わ

るという本当の意味を直感的に理解できる。

森氏は自らの足で当時を知る人々を訪ねて証言を集め、真実にたどり着いた。その姿勢から、情報を伝えることの重みと大変さを感じた。私は学生記者として活動する中で、大学の魅力や出来事を多くの人に伝えたいという思いで取材に参加している。将来はより多くの人々に正確で役立つ情報を届けられる仕事に就きたいと考えているが、この展示を通じて、森氏の「真実を伝える」という信念に強く共感し、自分の目指す道への思いがより一層強くなった。

「戦争が終わるということ」とは、互いを理解しようと努力し、共通点を見つけることだと私は思う。森氏のように、敵という面だけでなく、自分と同じ要素を見つけて相手と接し、相手がしたこと、自分たちがしたこと両方を顧みることで過去を乗り越えることができるのではないだろうか。今回の展示で知ることができた森氏の姿勢は、平和への向き合い方を私たちに教えてくれている。



森重昭氏の活動を通じて「戦争が終わるということ」の意味を問いかける企画展示＝多摩キャンパス「法と正義の資料館」

の「B24 ロンサムレディー号」に搭乗し、パラシュートで脱出するなどしたが捕虜となった人たちだった。

森氏はロンサムレディー号の米兵の足跡をでき得る限り調べ、その消息が判明するにつれて、「真実を遺族に知らせたい」という思いを募らせる。遺族を探し、住所が分かれば返信がなくても手紙を送り続けた。英語も独学で学んだという。はじめは拒絶的だった遺族も、やがて広島を訪れる人が現れ、森氏と被爆米兵遺族との交流が始まっていった。

亡くなった被爆米兵の足跡 調査で事実を掘り起こす

原爆の投下直後、米兵1人の遺体が多くの人に目撃され、虐殺されたとの噂が広まった。生存者もその嫌疑を恐れて口を閉ざし、アメリカ政府も被爆死ではなく戦死と遺族に伝えた。森氏の功績は、こうした歴史の闇に消えようとしていた事実を掘り起こしたことにある。

森氏は1995年、ロンサムレディー号の機長で、撃墜後に東京に護送され、被爆を免れたカートライト氏に宛てて手紙を書いた。このとき71歳となっていたカートライト氏は戦後50年の間、かつての部下たちの記憶を語ることはなかったが、森氏と交流を深める中で、経験を後世に伝える意味を考えるようになる。

会場には、2人が協力して被爆米兵の慰霊碑を建てることについて交わしたやり取りの書状も展示されている。カートライト氏が銘文を執筆した慰霊の銘板は1998年、広島中国憲兵隊司令部跡に設置された。

このほか、米兵がたどった足跡などを詳述したパネルや、調査の際に森氏が作成したスクラップブック、森氏が米兵遺族とやり取りした手紙などを展示。広島テレビ制作のドキュメンタリー「命ある限り―被爆者 森重昭の執念―」の映像も紹介している。

開催は2026年3月31日まで。日曜日と祝日は休館。電話042・674・2142。



練習でバーベルを持ち上げる神谷亮輔選手＝多摩キャンパス第1体育館

「学生日本一」で 取り戻した自信

重量挙部 神谷亮輔選手(商3)

全日本学生ウエイトリフティング個人選手権73キロ級を制覇

重量挙部の神谷亮輔選手(商3)が2025年5月の第71回全日本学生ウエイトリフティング個人選手権大会の男子73キロ級で優勝した。2024年11月のインカレ(第70回全日本大学対抗選手権)はスナッチで失敗してトータルの記録を残せず、メンタルや身体にもダメージが残った。“復活”を期して挑んだこの大会で見事に頂点に立ち、失いかけた競技への自信を取り戻した。

スナッチで自己記録を更新

スナッチ1回目の試技で持ち上げた125キロを「軽い」と感じた。2回目に自己新記録の135キロに挑み、「さわったこと(あげたこと)のない重量で怖さもあったが、平常心を保つことができた」と、バーベルを高く掲げたときの心境を思い返した。

大学2年だった半年前のインカレでは、スナッチを3回ともあげられず失格。クリーン&ジャークの記録(3位)は残したものの、トータルは記録なしに終わり、チーム(団体戦)に

貢献できなかった。1年生のインカレでもスナッチ5位の後、クリーン&ジャークでは記録を残せなかった。

大事な舞台で2年続いた不本意な成績にショックを受け、食欲も減った。一時は「シャフト（バーベルを支える棒）を握るのも怖かった」と振り返る。しかし、不振の原因を「試合直前の調整がうまくいかなかったから」と捉え、原点に戻って自分のウエイトリフティングを組み立て直そうと心に決める。

股関節の高さまで背中と脚の筋力でバーベルを引き上げるデッドリフトやスクワットなど、基本となる体づくりのトレーニングにそれまで以上に力を入れ、一時は60キロ台後半まで減った体重を戻すため食事と睡眠にも十分に気を配った。

迎えた今回の大会は、神谷選手にとって「絶対にやるという気持ち」で挑んだアスリートとしての復活を懸けた大会だった。

「試合で練習以上の力を発揮」

自身の強みを尋ねると、「大会（公式戦）で練習以上の力を発揮できる」と頼もしい言葉が返ってきた。ほかの競技の選手から「練習でできないことは本番でもできない」と、取材で何度も耳にしてきたので意外な答えにも感じた。



練習で持ち上げるバーベルの軽重を「重い日→軽い日→重い日→軽い日」などと、日によって交互に変え、体全体の筋力の“出力”を調整する。そうやって調子の波を作りだし、本番にピークを持っていく。調整がうまくいけば「できる」という自信が生まれ、「試合でスイッチが入り、力を発揮できる」と説明する。

課題はフォームの安定性を高めること。そのためには背中や太ももの筋力アップが欠かせない。そして、記録が思うように上がらなくても、多摩キャンパス第1体育館の道場に来てしっかり練習する。自炊してしっかり食べる。しっかり睡眠を取る。当たり前のことを当たり前に継続することが一番大事だと信じている。

多くのサポートに「結果で応える」

今回の大会には前日まで水分摂取を控えめにし、2キロ減量して出場した。このためか、スナッチの試技を終えた後、クリーン&ジャークの準備中に両足がつってしまった。それでもクリーン&ジャークでは全体の6位となる147キロをクリアして優勝した。ただ、「最後まで万全で戦えなかった」という悔いは残ったという。



表彰台で喜びの表情をみせる神谷亮輔選手(中央)

◆ Profile

神谷亮輔選手

かみや・りょうすけ。東京・東亜学園高卒、商学部3年。171センチ、75キロ。中学3年のとき、東京都のトップアスリート発掘・育成事業で重量挙げを体験、15人ほどがクリーン&ジャークに挑戦した中で、ただ一人、最も重い40キロを持ち上げることができた。これが競技を始めたきっかけになったという。将来の目標はオリンピック出場。中大ではインカレの個人、団体の優勝と大学新記録が目標だ。主なタイトルは高校3年のインターハイ(67キロ級)と中大1年の全日本ジュニア選手権(67キロ級)。



メダルを掲げる神谷亮輔選手。右は重量挙げ部の同僚で2位の田島佳選手

「後輩たちが『中大の重量挙げといえば神谷』という気持ちで入部してくると考えて、その期待や、支えてくれる周囲の期待に応えたい」という思いが、競技に向かうモチベーションになっている。ウエイトリフティングの魅力は、自分の成長が記録として出るところだという。

競技を基礎から教えてくれた高校時代の恩師とともに中大

OBの並木良憲さん（ソウル五輪出場、中大元監督）と清水洋平さんやトレーナー、中大の三木功司監督から見守られている大勢の人の支えを胸に、毎日バーベルと向き合う。神谷選手は「サポートには結果で応えるしかありません」と、“恩返し”を心に誓っている。

第71回全日本学生ウエイトリフティング 個人選手権大会男子73キロ級

（2025年5月17日、大阪府羽曳野市・タケダハムはびきのコロセアム）

	体重	スナッチ	クリーン&ジャーク	合計
①神谷亮輔（中央大）	72.75	125 ○ 135 ○ 140 ×	147 ○ 150 × 150 ×	282
②田島 佳（中央大）	73.00	125 × 125 ○ 130 ×	150 ○ 158 × 158 ×	275
③増井颯士（日本大）	73.00	120 ○ 125 × 125 ×	145 ○ 150 ○ 155 ×	270

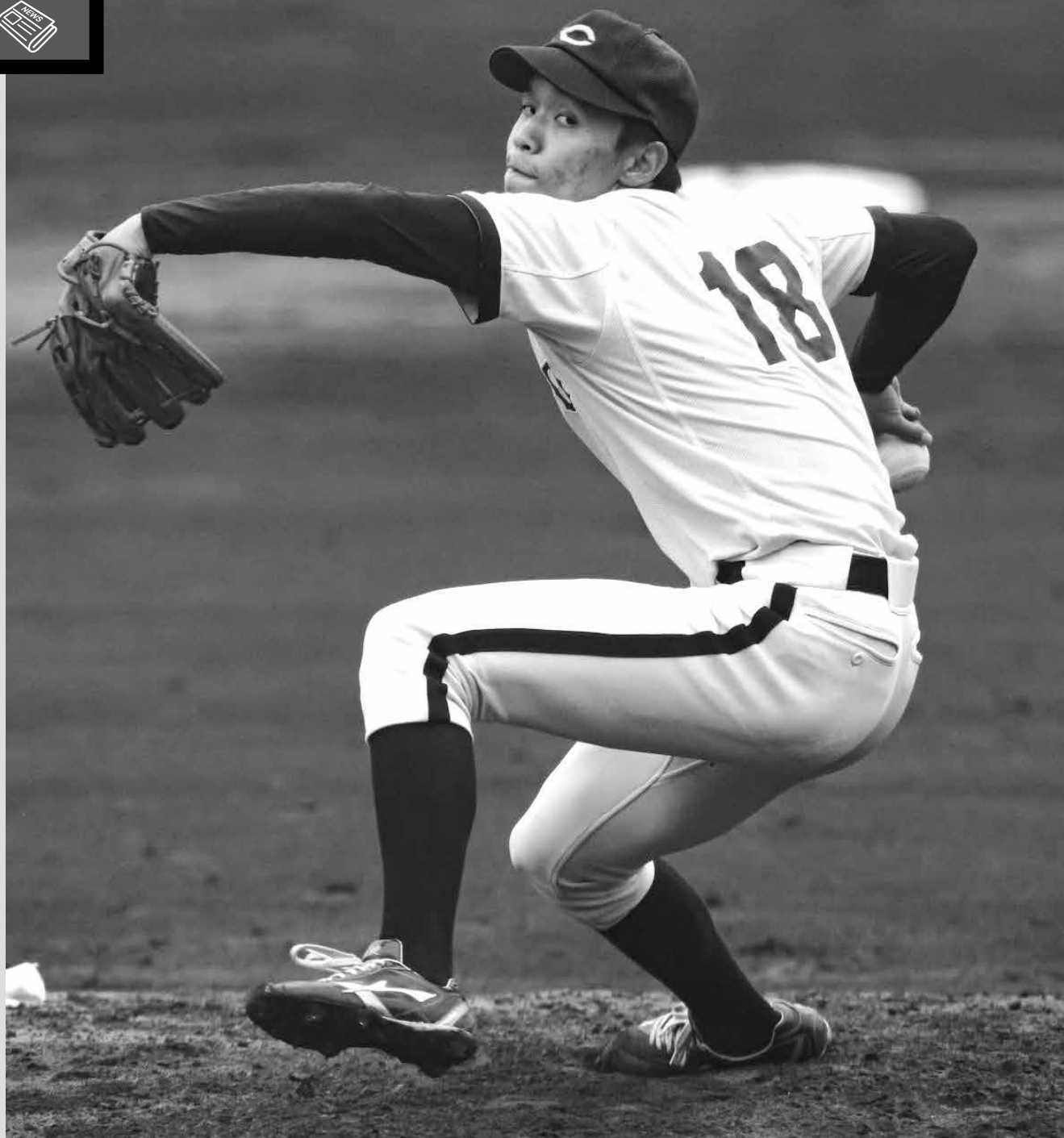
※上位3人。○成功、×失敗。単位はキロ

ウエイトリフティング（重量挙げ）

体重別に階級が分かれる。バーベルを一気に頭上に引き上げる「スナッチ」、最初の動作で肩まで引き上げて立ち上がり、次の動作で頭上に差し上げる「クリーン&ジャーク」の2種目がある。それぞれ3回の試技で持ち上げた最高重量の合計の重量を競う。試技3回とも失敗すると失格。



クリーン&ジャークの1回目、147キロに成功した神谷亮輔選手



力感あふれる大山北斗投手の投球フォーム

「最速152キロに8つの球種」 優勝の原動力のバッテリー

準硬式野球部が東都春季リーグ戦を制覇
大山北斗投手(商4)・若林舜大捕手(文4)に聞く

準硬式野球部が、東都大学準硬式野球の2025年春季リーグを制覇した。春秋リーグ戦の優勝は通算72度目。昨秋のリーグ戦で優勝を逃した悔しさをバネに、「王者中大を取り戻す」（若林舜大捕手＝文4）と部員全員が一丸となって挑み、全チームから勝ち点を挙げる完全優勝を飾った。優勝の原動力となったエース格の一人、大山北斗投手（商4）と若林捕手のバッテリーに話を聞いた。（記事中の写真はすべて準硬式野球部提供）

中1日で完投、完封勝ち

春季リーグ戦で、大山投手は投球数111球で専修大に完投勝ちし、中1日で登板した日大戦も127球で完封勝ちした。大山投手は「中1日でも球速が落ちなかった。（登板間隔が）短くても行けるという自信がついた」と振り返る。

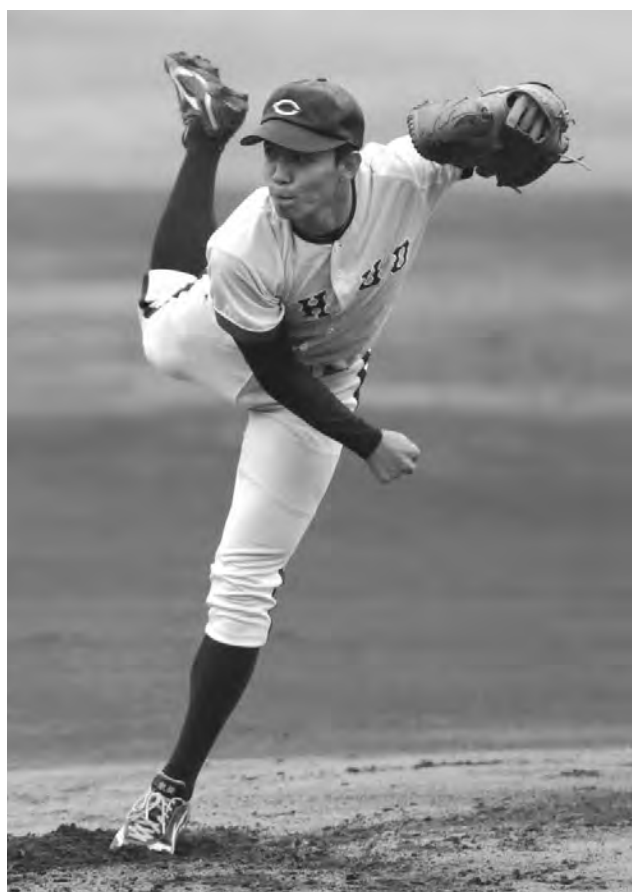
配球は、1年生からバッテリーを組み、春季リーグで挙げた6勝のうち、4試合でマスクをかぶった若林捕手と組み立てる。三振を奪うフォーク、フォーシーム、ツーシーム、チェンジアップの4つの球種を中心に、カーブ、スライダー、スプリッ

ト、カットボールを交えて投げ分ける。

「投げたい球をいつもサインで出してくれる」と、女房役のサインに首を振ることはない。高校時代までは投手だった若林捕手が、投手の心理に寄り添ったリードをしているといえそう。

ストレートの最速は高校時代の143キロから152キロに伸びた。球の表面がゴムで覆われ、空気抵抗の関係で硬式より球速が3～5キロ出にくいとされる準硬式では驚くスピードだ。

大山投手の特長は、被弾率（投手が安打を打たれる確率）や防御率の低さ。打たれ強く、大量失点しないというのも強



◆ Profile

大山北斗投手

おおよま・ほくと。沖縄・興南高卒、商学部4年。180センチ、78キロ。右投げ右打ち。興南高時代は甲子園出場なし。三振を奪える最速152キロのストレートやフォークが決め球。春季リーグ戦では6勝1敗、防御率0.71。63イニングを投げ、奪三振53、与四死球13。大学での主なタイトルはリーグ戦ベストナイン（3回）、最優秀投手賞（2回）、全日本大学選手権の優秀選手賞など。

高校の2学年先輩で「ピッチングも素晴らしく、人柄も温かい」とたとえるプロ野球オリックスのエース、宮城大弥投手を尊敬している。



◆ Profile

若林舜大捕手

わかばやし・しゅんだい。島根・平田高卒、文学部4年。178センチ、85キロ。春季リーグ戦の打撃成績は10打数3安打、打点1。高校時代は投手だったが、平田高の植田悟監督に、「大学からは捕手に」と勧められた。捕手としては肩の強さが武器。コロナ禍で大会が中止された高校選抜大会の21世紀枠として、夏に甲子園で開催された交流試合に出場した経験がある。尊敬する人は平田高の植田監督。



東都準硬式野球春季リーグ制覇を喜ぶ部員たち

みだ。若林捕手が「淡々と投げるが、ここぞという場面ではギアが入り、強気に攻めていく。すごい投手です」と褒めれば、大山投手も「配球にリズムがあり、テンポよく投げられる。盗塁阻止率も高く安心感がある」と若林捕手に全幅の信頼を置く。

8月の全日本大学選手権に照準

準硬式野球部は部員32人全員が寮生活を送り、「圧倒的に豊富な練習量」(若林捕手)がチームの自信や支えとなっている。チームの最大目標は、8月の全日本大学準硬式野球選手権の前年に続く連覇だ。

大山投手は「(トーナメントの)全ての試合で投げるつもりで練習し、(夏恒例の)秋田合宿でもしっかり投げ込みたい。

肩の可動域を広げ、(連投でも)けがをしないような体づくりをしたい」と話す。

若林捕手も「(全日本では)大山も毎試合、本調子というわけにはいかないかもしれない。しっかりとリードできる捕手として、得意な球以外でも勝負できるように、大山の投球に新しい“引き出し”を作りたい」と考えている。

春先から日本のプロ野球4球団のスカウトが大山投手の投球を視察に訪れ、準硬式では異例ともいえる注目を集めている。大山投手は「スカウトの方が来られたと聞き、準硬式からプロに行ける可能性があるんだと驚いた。野球に取り組む励みにもなっています」と語り、今秋のドラフト会議を待つつもりだという。スカウトのアドバイスを耳にして、体重を増やし、下半身を強化しようと、「一日5食」を実践している。

東都大学準硬式野球 2025年春季リーグ戦成績

1位	中央大	10勝2敗(5)
2位	国士舘大	8勝5敗(3)
3位	専修大	7勝5敗(3)
4位	日本大	5勝6敗1分(2)
5位	東洋大	2勝8敗(1)
6位	帝京大	2勝8敗1分(1)

※カッコ内は勝ち点。5、6位は順位決定戦による

準硬式野球

硬式野球との違いは使用球にある。準硬式のボールは、表面と見た目は軟式球のようにゴムで覆われ、中身は硬式球と同じようにコルクを糸で巻いたものが入っている。握った感触や大きさは軟式球と同じだが、打った感触と跳ね方は硬式球と同じ。バットは木製、金属製を問わないが、大半の選手は強い打球が飛ぶ金属製を使用している。